

局長による序

発展の基礎を築き、南科金鶏が高い声で啼く

南部科学工業園区管理局 局長 戴謙

2005年は南科が順調に成長した一年であった。過去8年間の迅速な発展をその礎として、2005年の南科は過去に引き続き年度目標を超える輝かしい成果を挙げている。中国語で言うところの「金の鶏高鳴る」一年であった。年間では計21社にのぼるハイテクノロジー・メーカーの進駐が新規に決定し、進駐企業は累計で178社を数えることとなった。年間売上は12,757億円となり、当初目標であった10,848億円を大幅に上回った。また就業人数では2004年比で8千余増加の41,270人に達した。

過去から現在に至る同園区の発展に伴い、オプトエレクトロニクス産業、集積回路産業、バイオテクノロジー産業の同園区内における形成が進んでいる。2005年の産業集積によって生み出された経済効果はますます顕著になってきている。オプトエレクトロニクス産業分野では、2005年から台南県政府の企画によって、LCD-TV専門区域の開発や企業誘致が開始されている。近隣の南科台南園区に既に形成されたオプトエレクトロニクス産業と互いに補い合う形として更に発展していくことであろう。また、奇美電子(CMO)は高雄園区において第2の次世代TFT-LCD工場を建設する予定であり、南科のオプトエレクトロニクス産業の発展に更なる推進力を加えることになるであろう。設備製造供給強化を推進するために、本管理局は積極的に優貝克(ULVAC)、大福(Daifuku)といった国際的に著名なオプトエレクトロニクス大手メーカーの誘致を行った。また、「南科FPD(flat panel display)設備製造整合センター」の設置勧誘を行うなど、南科のオプトエレクトロニクス産業が更に完備された一大産業となるよう、また、国際的なオプトエレクトロニクス産業における台湾の主導的立場確立を目指していく。集積回路産業では、トップメーカーである台積電(TSMC)、聯電(UMC)が12インチウエハ工場の量産及び聯電(UMC)の研究開発センターへの投資を継続した結果、国内12インチウエハ製造における南科の地位が揺ぎ無いものとなった。バイオテクノロジー産業面では、研究開発(高雄バイオテクノロジー園区)と量産体制(台南園区バイオホール、バイオテクノロジー専門区域、高雄園区バイオ医療技術器材産業專業地区のバイオ関係企業)、南部産官学の資源の協力統合によって、バイオテクノロジー産業の総合的な形成が完成へと向かい、その力がより強化されていくであろう。また、高雄園区の電信技術センターの「資産安全と公電実験室」や「マルチメディア・テレビ測定実験室」が2005年12月に国際認証を取得したのを機に、電信園区の発展は大きく前に一歩進んだと言えるであろう。

一大産業地域の形成を推進する他、本管理局は革新的な研究開発と地域に根ざした人材育成、外商サービス誘致、充実した生活機能、公共芸術の推進、出土文物遺跡の保存、園区の基礎建築の構築、高速鉄道振動減少工事等の業務など全ての計画を従来の予定に従って着実に行っている。こうした従来計画に沿う形で、2005年には健康生活センター、コミュニティセンター、サービスセンターの宴会場などについて外商誘致を遂行し完成をみた。この他に、高雄園区は本管理局の長期的な努力と各界からの支持を受け、2005年には多くの記録的な成果を得ることが出来た。オプトエレクトロニクス産業、電信産業、バイオテクノロジー産業が大きく発展するとともに、産官学協力推進会の成立、国科会補助による医療器材産業の発展、さらには、無線ブロードバンド企画の完成を初めとする基礎環境設備の完備など、高雄園区は更なる飛躍に向けた準備を着々と進めている。2006年における高雄の更なる飛躍に向け、南科の一段の成長が期待される。

成功は求め続けることから得られる。2005年は南科にとって「金鶏高鳴る」一年になった。2006年に向け、南科は更に困難な「2つの“5”」(年間売上上げNT\$5千億元と就業人口5万人)を目標として掲げる。2006年はきっと高雄園区が大きく花咲く時期になるであろう。2006年南科は世界のテクノロジー産業の大舞台に立ち、大きく羽ばたくであろう。南科は「南風再起」の列車として今高らかにその汽笛を鳴らし出発するのである。

戴謙

